

『表現学』第4号 (2018年2月15日) 抜刷  
大正大学表現学部表現文化学科

助動詞「よう」の使用効果  
—大江健三郎『個人的な体験』を一例として—

中島 紀子



# 助動詞「ようだ」の使用効果

—大江健三郎『個人的な体験』を一例として—

中島 紀子

## 1. はじめに

大江健三郎の『個人的な体験』を読むと、助動詞「～ようだ」の出現が非常に多いと感じる。特に「様態」また「比況（比喻・例示）」を表す「ような」「ように」が頻繁に使用されているようだ。作品における「ようだ」の使用の実態に関して調査し、実際の使用頻度について検証する。その結果、作品にどのような影響を与えているのかを考察する。拙稿では、文学性や芸術性といった文学の魅力とはかかわりなく、日本語文法としての意味・用法から、作品に与える影響について論じようと試みるものである。

また、「ようだ」の類義語「みたい」「らしい」も取り上げ、『個人的な体験』の文体の特徴をみていきたい。

## 2. 「ようだ」の辞典・事典における意味

まず、辞典・事典では、「ようだ」がどのような意味に定義されているかを確認し、その使用効果について考えていきたい。

### 2.1 日本国語大辞典

**ようだ**【様一】（活用は「ようだろ・ようだっ、よう、ように・ようだ・ような・ようなら・〇」用言・助動詞の連体形、「この・その・こんな・同じ」などの連体形、および体言に連体助詞の付いたもの。「の」で受けられる連体句などに付く）比況の助動詞。

①述語として、不確実な断定、断言することを避ける気持を表わす。語調を和らげるのに用いる。

「さし汐がたいふはやいやうだ」

「たしかお庭を久助どんが掃除をして居る様でござめます」

「いよいよ左様（さう）なるやうならば、素の通りに室町の店を開きませう」

「この方もおなじ様な打扮（いでたち）ではおじゃつたが」

②ある事物を示して、それと同じ性質、状態であることを表わす。

④比喻として用いる。同類のものをあげて、性質・状態を説明する。

「高尾をみるやうなはりのつよひ女郎でも」

「モウ人の鼻からけぶのでやうなさむさだ」

「わたくしのやうになってはいけません」

「丸で鯛を喰ふやうだ、うめエうめエうめエ」

「馬は海の鷗を追ふかのやうに尻尾を振り振り走った」

⑤一類、同類に属することを表わす。同類のものの中から一つを取り上げて例示とし、代表させる。同類中の一例として扱い、そのものだけを問題にすることを避ける気持を表わすことが多い。

「それこハア、お前がたの様（ヤウ）な江戸衆にヤア」

「あれは音羽やの様（ヤウ）に好男でなくちゃアはへねへ」

「親方も自己（おいら）がやうなものでも、やれこれと信切に言つて下すつた」

③主として連用形「ように」の形で用いる。

⑦行動の基準となる方法、状態、形や目的を表わす。

「此後まごつかねへやうに分別して、どうとも好にするが能と」

「自分は終列車に間に合ふやうに皆と別れて上野へ向かった」

⑧あとの熟語の部分省略して、その部分の受持つべき願望、他人への希望、勸奨、命令、依頼などの意を和らげて表わす。

「すゑずゑは、金銀などをあきなうやうにとぞんずる」

「安寿は守本尊の地藏様を大切におし。厨子王はお父様の下さつた護刀を大切におし。どうぞ二人が離れぬやうに」

「お帰りに是非一寸でいいからお寄り下さるやうにといふ事です」

### 2.2 日本文法大辞典

**ようだ**：①類似の事柄をとりあげて、ものごとの性質・状態を述べる。

「雪のように白い肌」

「にが虫をかみつぶしたような顔」

「いかにも王様のような貫禄だった」

「まるで狂ったようにおどりはじめた」

名詞に、助詞の「の」がついた形をうけることが多い。また、「まるで」「いかに」「ちょうど」などの副詞と呼応する場合が多い。

②手近なわかりやすい例、あるいは、著しい例をひいて述べる。

「富士山のような形の山が羊蹄山です」

「隣のおじさんのように小柄な紳士」

「ちょうど戦時中のような混乱だった」

「図に示すように三つに折り曲げなさい」

「たとえば・ちょうど・まさに」などの副詞と呼応することが多い。

③内容や程度が、同質あるいは同等であることを表わす。

「字も読めないようなやつらだ」

「五メートルを越すような大波にさらわれた」

「全盛時のような速球はみられない」

④目標・目的あるいは基準などを示す。

「時間に遅れないように家を出た」

「早くユニホームが着られるようにになりたい」

「テレビを見すぎないように注意しよう」

「呼ばれたら、すぐ来るようにして下さい」

「法に触れるようなヘマはしないよ」

⑤結果や結論に到達するのに、不自然なところや矛盾がないことを表わす。

「この実験でわかるように目に害がある」

「票の伸びが示すように党勢は上り坂にある」

「景気の後退は避けられないように思う」

「人気がないのも当然ように見うけられる」

⑥前後の文脈や、話の内容を引き合いに出すのに用いる。

「以上のような理由で推薦を辞退します」

「右に述べたような経過でございます」

「つぎのような問題が起こると思います」

「こんなようなわけで、今のところお引きうけできません」

⑦間接的に他人のことばを引用したり、文句や諺をひいたりするのに用いる。

「午後から天気がかげずれるようなことを言っていた」

「なんとか出席できるような口ぶりでした」

「文句なしとしてような顔つきだった」

「すぐ来るように伝えてくれ給え」

㊦おもに文末に用いて。

①理由や根拠が多少不確かな断定を表わす。

「両親をかかえて生活が苦しいようだった」

「彼の話では、大した被害はないようだ」

「この調子なら勝てるような気がする」

②断定を避けて、遠まわしに判断をのべる。

「犯人は君たち三人のようだね」

「どこかで見かけたような顔なんだけど」

「なんとなく元気がないような様子だった」

「どうしたの？ 顔色が悪いようだね」

③「ように」の形で。

㊦依頼や軽い命令を表わす。

「記者の時間には絶対に遅れないように」

「もっと大きな声で返事をするように」

「御両親によろしくお伝え下さいますように」

「そろそろ出発準備にかかるようにしろ」

㊦願いや希望を表わす。

「一日も早くお元気になるように」

「神さま、お助けくださいますように」

「お導き下さいますように願いあげます」

『日本文法大辞典』によると、「様態の助動詞」とは、事物の存在状態、行為・様子などについて、軽く推量し判定する意味を表す助動詞である。現代語の「ようだ」「ふうだ」「らしい」「そうだ」は、いずれも「様態の助動詞」がそれにあたり、推定の助動詞を含めていうこともある。「推定の助動詞」とは、ある根拠なり事態に基づいて推量判断する意を表す助動詞であり、推量の意味は比較的軽いものである。「推定の助動詞」は現代語では「らしい」「ようだ」がある。「推定の助動詞」は、客観的に観てそのように思われるという様態的推量が特徴であって、婉曲な一種の断定法である。「推量の助動詞」は、不確実なことを推測したり、未来・現在・過去にわたる事柄を想像したりする意を表す助動詞である。現代語では「う」「よう」「らしい」「まい」「ようだ」「そうだ」などがある。

さらに、現代語の「ようだ」「ようです」「ふうだ」「みたいだ」「みたいですよ」は、「比況の助動詞」と呼ばれ、二つ以上の事柄や状態などが、類似・同等であると見なしたり、例示しうることを示す意を表す助動詞で、比喩によって相手の想像や心理的反応を誘うもの。婉曲に断定したり、具体的に納得させるために用いるとある。

このように、辞典・事典において、「ようだ」の意味・用法は、大きく分けて「様態」と「比況（比喩・例示）」、さらに「推量」を表すことが確認できた。

### 3. 『個人的な体験』における助動詞「ようだ」の使用頻度

実際に小説本文における「ようだ」の表出を調べてみると表1の結果となった。ここでは、「見よう」「食べよう」などの意思を表す「よう」の用例は除いた。

「名詞+ように」「動詞+ように」という形が最も多く使われ、表1のとおり、共に150以上の用例があった。使用頻度の高かった「名詞+ように」「動詞+ように」を章別に見ていくと、「名詞+ように」は第2章で、「動詞+ように」は第4章でそれぞれ多く使われていることがわかる。

章	総ページ数	よう												みたい							小計	合計	
		+よう・ようだ				+ような				+ように				+みたい		+みたいな		+みたいに					
		名	代	動	その他	名	代	動	その他	名	代	動	その他	名	動	名	動	名	動	名			動
第1章	24	2	0	1	0	1	7	7	0	15	0	14	0	47	0	0	4	0	2	0	6	53	
第2章	23	1	0	2	0	6	2	6	1	25	3	12	1	59	0	0	2	0	5	1	8	67	
第3章	24	1	1	1	1	6	5	5	0	10	2	9	0	41	0	0	1	0	6	0	7	48	
第4章	31	0	0	3	0	4	5	2	0	14	1	23	1	53	2	0	3	0	12	2	19	72	
第5章	23	1	0	3	0	5	4	2	0	16	2	17	0	50	0	0	4	1	3	0	8	58	
第6章	22	4	0	2	0	9	1	5	0	20	0	20	1	62	1	0	4	0	4	0	9	71	
第7章	21	0	0	2	0	4	1	9	0	11	6	7	0	40	1	0	3	1	1	0	6	46	
第8章	24	1	0	3	0	2	1	8	0	7	2	13	0	37	2	2	3	2	3	0	12	49	
第9章	24	0	0	0	0	1	0	6	0	5	3	9	0	24	0	0	2	1	1	0	4	28	
第10章	26	0	0	1	0	4	1	5	0	9	2	17	0	39	0	2	1	0	3	0	6	45	
第11章	23	0	0	3	0	2	5	9	0	11	11	15	0	56	0	0	0	0	2	0	2	58	
第12章	27	1	1	7	0	3	0	12	0	10	2	12	1	49	1	0	2	0	3	0	6	55	
第13章	15	1	0	2	0	1	3	5	0	2	1	8	0	23	0	1	3	1	4	0	9	32	
小計		12	2	30	1	48	35	81	1	155	35	176	4	580	7	5	32	6	49	3	102	682	
合計		45				165				370				580	12		38		52			102	682

表1 『個人的な体験』における「ようだ」「みたい」の使用頻度

#### 3.1 「名詞+ように」

第2章は、主人公鳥（バード）に赤んぼうが生れるが脳ヘルニアであると宣告される場面であり、ここで使用されている「名詞+ように」は全て「比況」又は「例示」の表現である。（ ）内には、誰、又は何に関する比喩であるか、また一部主語を示した。

2-1 脅かされたワラジムシのように体をまるめて眠っていた。（鳥）

2-2 ズボンの折りかえし裏に跳びだしナイフを錘りのようにぬいつけておいたことを思いだす。（ナイフ）

2-3 鳥はベッドをぬけだすと冷えびえと湿っている床をはだして踏んで電話機のところまでウサギのように跳んで行った。（鳥）

2-4 怒った馬のように激しく砂利を蹴って生垣のあいだから舗道へと出て行った。（鳥）

2-5 舗道のアスファルトを水の薄い膜がおおっているのを疾走する自転車のタイヤがこまかく波だたせ小さな霧のように飛びちらせる。（タイヤ・水の膜）

2-6 駆ける尨犬のように荒あらしくそこを乱している雲。（雲）

2-7 鳥のオナガの群の淡青色の尾に銀色の水滴が風のようにたかっているのを見た。（水滴）

2-8 バネのように弾いた折れ口がかれの耳を傷つけた。（枝）

2-9 鳥はかれ自身の叫喚のようにブレーキをたかならせて、病院の車寄せに乗り入れた。（ブレーキ）

2-10 かれは泳いだばかりの犬のように濡れていた。（鳥）

2-11 はだけた診療衣から覗く胸はラクダの背のように毛だらけで、（医者）の胸

2-12 まちがった解答をした生徒を咎める口頭試問官のように険しい眼で鳥を見つめた。（医者）

2-13 たちまち泡のように弾けた。（憤りと悲しみの感情）

2-14 遥かな遠方のできごとのように感じようとした。（鳥・光景）

2-15 当然のことのようにすべて受けいれてしまう。（鳥・不運）

2-16 水をたたえたフラスコのなかで酸素の気泡がたてている小さな破裂音だけがひそかな通信のように聞こえてきた。（気泡の破裂音）

2-17 いまサイレンはかれの内部の疾患のように、（サイレン）

2-18 あきらかな権威の熱に鳥は飴のようにとろけようとしているのだった。(鳥)

2-19 負け犬のように極度に受身な鳥の反応が医者  
の眼からためらいと疑いの影を払拭した。(鳥)

2-20 眼は貝殻のあわせめのようにかたくつむり鼻孔  
にはゴム管をさしこまれ、(赤んぼうの眼)

2-21 おれの息子は戦場で負傷したアポリネールのよ  
うに頭に繃帯をまいてると鳥は考えた。(赤んぼうの  
頭)

2-22 そしてアポリネールのように頭に繃帯をまいて  
声のない叫び声をあげている……(赤んぼうの頭)

2-23 アポリネールのように頭に繃帯をまいて、(赤ん  
ぼうの頭)

2-24 おれの息子はアポリネールのように頭に繃帯を  
まいてやってきた、(赤んぼうの頭)

2-25 おれは息子を戦死者のように埋葬してやらねば  
ならない。(赤んぼう)

使用されている名詞は、「ワラジムシ」「錘り」「ウサギ」「馬」「霧」「尫犬」「虱」「バネ」「叫喚」「犬」「ラクダの背」「口頭試問官」「泡」「できごと」「当然のこと」「通信」「疾患」「飴」「負け犬」「貝殻のあわせめ」「アポリネール」「アポリネール」「アポリネール」「アポリネール」「戦死者」と、生物、無生物を問わず挙げられ、その状態を想像する手助けとなっている。

2章で4度出てくる「アポリネール」に関しては、本文中に全11回現れ、脳に問題を抱える赤んぼうの頭の様態を表すために重要な例示である。その「アポリネール」、本名ウィルヘルム・アポリナリス・ド・コストロウィツキーは、饗庭孝男他編(1993)によれば、1880年8月26日に亡命ポーランド貴族の娘を母とする私生児としてローマに生れ、1913年に2冊の画期的な書物によって新しい時代のパイオニアとなった。その2冊とは、いっさいの句読点を排除した詩集『アルコール』と当時もっとも革新的な絵画を庇護した『立体派の画家たち』である。前者は『カリグラム』(1918)とともにアポリネールの代表詩集となり、後者は新しい画家たちの経典として、多数の詩人や作家に影響を与えた。第1次世界大戦が勃発すると、外国人であるアポリネール(1916年にフランスに帰化)はフランスを愛する気持から自ら志願してニームの砲兵隊に入り、戦傷を受けて戻ってきた。2度の頭部切開をしなければならぬような重傷だったが、この重い傷が癒えると、再び活動を始めた。この時の頭に包帯を巻いている様子が、『個人的な体験』において採用されている。著者は、東京大学時代フランス文学科に在籍している

が、今回は著者とアポリネールの関係を考察するには至らなかった。強いてあげるならば、アポリネールは2度穿頭術を受けており、著者の長男である大江光氏も、2度の脳外科手術をしているという共通点がある。

3.1で見てきたように、第2章では、主に主人公鳥の様子を比況の「ように」を用いることで細かく描写し、心理描写までも効果的に表している。また、「アポリネールのように頭に繃帯をまいて」という描写を繰り返すことによって、偶然見た息子の姿に対する主人公の激しい動揺が伝わってくる。

### 3.2「動詞+ように」

「動詞+ように」が最も多く使用されている第4章では、以下のように全て「様態」を表している。この章は、主人公鳥と火見子が火見子の家で、鳥が義父からもらったウイスキーを二人で飲んでいる場面である。( )内には、誰に、又は何についての「様態」を表現しているかを示した。

4-1 嘲弄するように軽くいった。(火見子)

4-2 火見子の祖父の九州の漁民はウラジオストックから誘拐するようにしてつれてきたロシア娘と結婚したのだった。(火見子の叔父)

4-3 鳥は獵犬がくくん鳴きだてるように周囲を見まわしながら、(鳥)

4-4 それから可能なかぎり少ない言葉で説明できるように事情を単純化すると、

4-5 鳥は頭がふたつあるように見える自分の赤んぼうと、(赤んぼうの頭)

4-6 「辛い経験をしたわね、鳥」と女友達はいうと瞼のなかがすっかり黒いものでうずめられているように見える表情のはっきりしない眼で、かれをおだやかに見つめた。(火見子)

4-7 火見子は暗い頭上からふりそそいでくる黒い水滴をささぎろうとしているように左手を高くかかげ、(火見子)

4-8 かれの腕は震えつづけていたのでグラスは怒った鼠が歯を噛みならしているようにせっかちで鋭い響きを発した。(鳥)

4-9 洗ったばかりの皮膚が余分にはみださないように、細心に注意をはらって坐った。(火見子の皮膚)

4-10 鳥は聞きおわってからもういちどやってくれるように頼んだ。(鳥)

4-11 暗く乱れる夜の空へ男は鱗の炎に燃えたちながら飛翔してゆこうとしているように見える…(水彩画の中の男)

4-12 ちょうど樹木の幹から枝や葉が分れるように様

ざまな宇宙がとびだしてゆくことになるわ。(宇宙)

4-13 火見子はたちまち自分の多元的宇宙論に興味を失ってしまったとでもいうように索然としていった。

(火見子)

4-14 悪い手がつづくトランプ遊びからちょっと降りるように、しばらくこの世界から降りていたいのだった。(鳥)

4-15 なんとなくおたがいに寛大な微笑をかわしあって甲虫が樹液を飲むように真面目にウイスキーを飲んだ。(鳥・火見子)

4-16 自分がこの世界から、うまく降りつづけていられるように…(鳥)

4-17 鳥は不当に子供あつかいされたように感じて執拗になった。(鳥)

4-18 火見子は霧のなかをただよっているように見えた。(火見子)

4-19 鳥はエラーつづきで選手交替を命じられたバスケット・プレイヤーがベンチに戻って水を飲むように、(鳥)

4-20 かれの動作をめざとく見とがめて火見子は勝ち誇ったようにいった。(火見子)

4-21 むしろ性的なものを嫌悪しているように見えるわ。(鳥)

4-22 鳥は体をおこし火見子がかれにむかってそうしたようにカーテンのあわせめをつまみあげて来訪者を覗いてみた。(火見子)

4-23 縮んだように窮屈げながら、一応きちんとした麻のタキシードを着こんだ小柄な紳士が覗きたいに丸い頭をあおむけて、(紳士)

第4章では、「様態」の「ようだ」を頻繁に使うことで、鳥と火見子のそれぞれの様子が詳しく手に取るように生き生きと伝わってくる。

著者は、比喩の対象を、人間、動物、植物と多岐にわたって引用している。比喩の対象を人間に限定しないことによって、表現描写を豊かにする効果が出ている。第2章でも「犬」が登場していたが、筆者が実生活で犬を飼っていたことがある、という事実は探し出せなかった。「うさぎ」に関して著者は、『日本の作家28 安岡章太郎』の中で、幼年時に「うさぎ」を飼っていたと言っている。

第6章においては、以下の通り「名詞+ように」「動詞+ように」が共に多く出現する。

「名詞+ように」

6-1 <<アポリネールのように頭に繻帯をまいて>> (赤

んぼうの頭)

6-2 鳥の方では体の内部が出荷後の倉庫のように空虚だ、とでもいう具合に。(鳥)

6-3 特児室のドア、それは氷室の外扉のように堅固なブリキ板張りだ。(ドア)

6-4 けわしく乾いた眼のピューマのように赤んぼうたちを眺めた。(鳥)

6-5 かれらにも白い綿の肌着とおむつは鉛の潜水服のように重たげだ。(肌着とおむつ)

6-6 赤んぼうたちはみな食欲のない錢亀のように憂わしげに唇を閉じている。(赤んぼうたち)

6-7 かれはお伽話絵本の小人のように分別くさい顔つきをして鳥を眺めた。(赤んぼう)

6-8 看護婦は、鏡のなかに歩みいる人間のように、すでにガラス仕切りの向こうに入りこんで、(看護婦)

6-9 赤んぼうが忍耐している不快は、かれの後頭部から確かにもうひとつの赤い頭のようにとびだしている瘤がひきおこすものであるにちがいない。(瘤)

6-10 エビみたいに赤く、傷痕のようにてらてら光る皮膚につつまれ、赤んぼうはいま猛然と生きはじめている、重い瘤の錘りをひきずって、(赤んぼうの皮膚)

6-11 赤んぼうたちの叫び声の嵐がまたひとしきり起って、炉の中のように光の煮えたつガラス仕切りの向うをおののかせた。(ガラス仕切りの向こう)

6-12 鳥は自分にもまた、赤んぼうたちのように小さなベッドか保育器がほしいと思った。(鳥)

6-13 とくに保育器、霧のようににたちこめる水蒸気で充満した保育器、(水蒸気)

6-14 それは濡れた無地の皮手袋のように見える。(鳥の手)

6-15 おぞましく黒いウンカの群のように、かれの頭のなかの暗闇にあらわれ、凄じい勢いで増殖しながら、(鳥の熱望)

6-16 鳥は蛔虫のように自分にとりついたエゴイスムを恥かしく感じて、(鳥のエゴイスム)

6-17 鳥は、たとえば睾丸の襞のように、自分の肉体のいちばん醜いけれどももっとも快楽に敏感な場所を(快楽に敏感な場所)

6-18 鳥はしきりに身震いしながら病後の人間のようにに不確実に歩いて行った。(鳥)

6-19 若いゴムの樹のようにみるみる育った。(芽)

6-20 ネガのように黒白を逆に広場の風景を見ながらタクシーを探した。(鳥の眼)

「動詞+ように」

6-21 患者はもう一度、威嚇するように足の上に体をのせて生きている人間の代表、鳥を睨みつけると(患

者)

6-22 いわばこの病院でもっとも健全で美しい赤んぼうの父親にたいして話しかけるとでもいうようにそういった。(看護婦)

6-23 頭がふたつあるように見えますよ、(赤んぼう)

6-24 鳥が、これはどうしてみんな一斉に眼ざめたんです?と問いかけるように看護婦をふりかえると、(鳥)

6-25 水族館の水あかやプランクトンでくもった水槽を覗きこむように、腰をかがめ、(鳥)

6-26 顔じゅうが治癒したばかりの火傷の痕でおおわれているようにてらてらしているのだ。(赤んぼうの顔)

6-27 銃が火薬で装填されるように鳥のうなだれた頭は赤んぼうたちの叫喚で装填された。(鳥の頭)

6-28 医者にむかって挑みかかるように話している小男の高い声の支配下にあった。(小男)

6-29 しゃむにことを有利に運ぼうとしているように見える。(小男)

6-30 ガラス仕切りごしに狙われているとでもいうように身がまえた。(鳥)

6-31 かつ強大な拳で殴りつけられたように充血しつづつあった。(鳥)

6-32 わけ知りの指にひとなでされたように感じて、(鳥)

6-33 かれはメンバーに聞こえないように声をひそめてこういった。(医者)

6-34 かれの背に追いかけるように看護婦が叫んでよこした。(看護婦)

6-35 鳥は犯罪の現場から逃れるように闇雲にせきたてられてほの暗い廊下を歩いて行った。(鳥)

6-36 娘は鳥をキラキラ光る眼で挑むように見つめながら、(娘)

6-37 自分自身をいとおしむように優しく指を沈みこませた、(娘)

6-38 ぴよん、ぴよん跳ねるようにしながら鳥と並んで歩いた。(小男)

6-39 それからかれは意を決したように大声をはりあげ、(小男)

6-40 もし火見子が、おれを拒むとしたら、と鳥は自分を咎うつように苛いらと考えた、(鳥)

第6章では、「名詞+ように」で比喩を多用することで、鳥自身、また赤ん坊に関わる非常に細かい描写により、赤ん坊との対面を通常の新生児のそれとは違うものであることを際立たせている。また、「動詞+ように」の使用により、鳥自身、医者、看護婦、肝臓がない赤ん坊の父親である小男、入院中の色情狂の娘など、日常とは一線を画した病院の中の異常性を伝えることに効果を発揮している。

#### 4. 『個人的な体験』各章の登場人物とあらすじ

表2 章別「登場人物」

人章	鳥	妻	赤んぼう	病院関係者	医者他	義父	養母	火見子	義父	火見子の者	予備校関係	研究開発者	スラヴ語	達	火見子の友	菊比古	の若造達	ジャンパー	人物	その他の
1章	○						(声)											○	男娼	
2章	○		○	○			○													
3章	○				○	○	(声)	(声)												床屋・元学生
4章	○							○							(声)					
5章	○							○			○	○								
6章	○		○	○				○												患者その家族
7章	○							○												
8章	○	○			○		○	○									(話題)			
9章	○							○			○									
10章	○		○	○				○					○							
11章	○				(声)			○	○											
12章	○		○	○				○							○					警官
13章	○							○							○	○				
前半	○	○	○	○	○	○	○											○		



第2章では「名詞＋ように」、第4章では「動詞＋ように」、第6章ではいずれもその使用頻度が高かったが、それぞれ、各章の登場人物またはあらすじとどのような関係があるのか、その特徴について調べてみる。

**第1章：**主人公の鳥（通称バード）は、いつかアフリカの土地を踏むことを夢みている27歳と4箇月の予備校の英語教師である。彼の妻は出産を控え彼女の母に付添われて病院にいる。アフリカの地図を購入し、洋書店を出た鳥は、男娼から性倒錯者と間違えられる。男娼とのやりとりの後、ゲームセンターに立ち寄ったことから竜の刺繍のジャンパーを着込んだ若者たちと闘争することになる。

**第2章：**男子の赤んぼうが生まれるが、脳ヘルニアであると宣告される。鳥が見た彼の息子は、アポリネールのように頭に繃帯をまかれていた。

**第3章：**鳥は、「赤んぼうは長くもたない」と医者から宣告される。義父に会うために訪れた大学で、予備校時代に鳥の生徒であり、鳥に好意的だった学生に会う。義父に男子が生まれたが脳ヘルニアであることを報告する。不意にひとりの女友達のことを思い出し訪ねることにする。

**第4章：**女友達、火見子の家。義父からもらったウイスキーを二人で飲みながら、鳥は火見子に赤んぼうは生まれたがすぐ死んだと話す。火見子の夫が自殺した話が出る。鳥は、火見子がスポーツ・カーを走らせに外出している間、少年じみた男と、続いて中年男が彼女を訪ねてきた声を聞く。

**第5章：**翌日、鳥は火見子の家から二日酔いのまま出かけ、何とか予備校へたどり着く。しかし、授業を始めたが終了を待たず、教室で嘔吐する。鳥を慕う学生の一人が助っ人に入る。一方、スラヴ語研究会の世話人である友人から、研究会の講師であるデルチェフさんが日本人の小娘のアパートにいりびたり公使館に戻らないので問題が起きる前に引き戻したい、と相談をもちかけられる。

**第6章：**鳥は赤んぼうの手術について医者から切り出されるが、手術をしても正常に育つ見込みはうすく、最終的にミルクの代わりに砂糖水を与え、様子を見ることで話がつく。病院内で、肢のない男性や色情狂の娘、肝臓をもたずに生まれた赤んぼうの父親に遭う。

**第7章：**鳥は火見子に赤んぼうが活着していることを打ち明ける。火見子の発した「妊娠」という言葉に反応し性欲を失うが、鳥は結局、火見子と、鳥が欲した反社会的な性交をもつ。

**第8章：**鳥は妻の出産後初めて妻と対面する。赤んぼ

うは「内臓が悪い」と説明し、本当のことは話せない。妻は、菊比古を例に鳥を「弱者にとって一番大切なときに見棄ててしまうタイプ」の人間ではないかと責める。

**第9章：**鳥は授業中に嘔吐したことが原因で、予備校を辞めさせられる。火見子と関係をもつ大学の同級生だった女性が火見子を訪ねてくる。鳥は女友達から、赤んぼうに砂糖水だけ与え衰弱死するのを待っていることを非難される。

**第10章：**鳥は火見子の家で、病院から赤んぼうの様態変貌の連絡がくるのを待っていた。テレビで、ソヴィエトの核実験の再開のニュースを聞いても心ここに在らずだった。デルチェフさんを訪ね、公使館に戻るよう説得するが失敗に終る。

**第11章：**鳥は火見子の義父と対面する。彼から、火見子と二人でアフリカ旅行をしてはどうかと薦められる。病院から連絡を受け出向くと、鳥の期待とは裏腹に赤んぼうは回復しつつあり、医者から再度手術の件を切り出される。鳥はそれを拒否し、火見子の提案で赤んぼうを火見子の知り合いの医者処に処理してもらうことに同意する。その医者はいつか火見子を訪ねてきた中年男だった。

**第12章：**鳥と火見子は病院から赤んぼうを引き取り、火見子の知り合いの医者を目指して車を走らせる。途中、道に迷ったり、片目運転のために警官につかまったりしながら、ようやく知り合いの病院を探し当てる。病院に着く頃には二人とも心身共に疲れきっていた。

**第13章—前半：**鳥と火見子は、火見子の知り合いの男色家の酒場へ行き、鳥は菊比古と再会する。鳥はウイスキーのグラスをあけているうち、赤んぼうから逃げだすかわりに、彼をひきうけて育ててゆく決心をする。止める火見子を振りきり、鳥は一人タクシーで赤んぼうを取り戻しに病院へ向った。

**第13章—後半：**秋の終り。赤んぼうは正式に手術を受け、脳ヘルニアではなく、肉瘤だったことがわかる。火見子は少年じみた男とアフリカに発ち、鳥は、いつか予備校で鳥を慕う学生から薦められた、外国人の観光客相手のガイドになることを決める。病院の廊下で、鳥が闘争した竜の刺繍のジャンパーを着た若者たちとすれ違うが、彼らは鳥には全く注意を払わなかった。

赤んぼうが登場する章において、様態また比況を表わす「ようだ」が頻繁に使われているのではないかと推測し、調査に当たった。第2、6、10、12、13章の後半で、赤んぼうが登場しており、資料1、2を照らし合わせてみると、「ようだ」が赤んぼうの様態を表す場面

で多く使用されていることがわかった。ただし、13章後半では事態が収束を向かえたせい、か、「ようだ」の使用頻度も多くはなかった。

## 5. 「みたいだ」「らしい」との比較

「ようだ」を「みたいだ」「らしい」と比較するにあたり、「動詞+よう・ようだ」のうち「様態」を表しているものを取り上げる。用例左の番号は使われた章を表し「ようだ」は「よ」、「みたいだ」は「み」、「らしい」は「ら」を記し、その後に通し番号をつけた。

### 5.1 「よう・ようだ」の用例

- 1-よ-1 まだ檻の蓋はひらいているようだった。(檻の蓋)
- 2-よ-2 靴をよごした鳥が植込みからひきかえしてゆくと院長は鳥を高飛車に叱ったことをいくらか気に病んでいるようだった。(院長)
- 3-よ-3 とくにバルコンに出ている妊婦たちは踝までとどく長い夜着を微風になぶらせて中空をすぐさま気づいたようだった。(二人の消防士)
- 4-よ-4 あなたはまだ回復していないようだわ。(鳥)
- 4-よ-5 正確にはおぼえていないようだし。(鳥)
- 5-よ-6 レモンはとても効くようだったよ。(レモン)
- 6-よ-7 ガーゼの紐で拘束されたようだった。(鳥)
- 7-よ-8 火見子はぐったり横たえた体を数千匹の欲望のアブに襲われているようだった。(火見子)
- 8-よ-9 嬉しそうに笑っていられるようだったりして現実のことが夢なのかはっきりしなくなったわ。(院長先生)
- 8-よ-10 香りの微粒子でそめたててしまうようだった。(グレープ・フルーツ)
- 10-よ-11 呆けているのでもないことをさとったようだった。(火見子)
- 11-よ-12 朝から大あわてで逃げだすようだと、(男友達)
- 11-よ-13 鳥を見つめて息をのむようだった。(医者たち)
- 12-よ-14 鳥はそれを追いかけるようとはしないで、(鳥)
- 12-よ-15 とくに異常はないようだった。(エンジン)
- 12-よ-16 硬く握りしめた拳をしきりにこまかく動かし寝籠から逃げだしたがっているかのようだった。(赤んぼう)
- 12-よ-17 赤んぼうたちはみな一様に昂奮しきっているようだった。(赤んぼうたち)
- 12-よ-18 それは五千匹の油蟬をつみこんで走るよう

だったし、(赤んぼうの声)

13-よ-19 かつての単純な菊比古ではないようだった。(菊比古)

13-よ-20 かれらはぼくにまったく注意をはらわなかったようですね。(いまの連中)

### 5.2 「みたい」の用例

『日本国語大辞典』によると、助動詞「ようだ」は、江戸時代に「(を) 見るようだ」「(を) 見たようだ」の表現が比喩に用いられ、その「見たようだ」から現代の「みたいだ」を生じたとあり、「みたいだ」の意味・用法は以下のとおりである。

**みたいだ** (活用は「みたいだろ・みたいだっ、みたいで、みたいに・みたいだ・みたいな・(みたいなら)」。体言、形容動詞の語幹、および活用語の終止形に付く。比況の助動詞。近世語の「見たようだ」の変化したもの)

①性質や状態が他の何かと似ていることを表わす。

「お前のやうに子供みたいにあどけなくっちゃア困るね」

「牢屋見(ミ)たいだなと兄が低い声で私語(ささやいた)」

「馬鈴薯と豚肉とで、シチュー見たいなものを拵へかけて」

「父さんみたいに薄鬚はやし」

②例示して強調する意を表わす。

「家みたいに何にもない世帯も些と希しいですよ」

「僕みたいな者は、海や山へ行くと、直ぐもう飽きちゃって」

③不確かなまま遠まわしに断定する意を表わす。…ようだ。

「昨晚は雨が降ったみたいだ」

「隣の家は誰もいないみたいだった」

表1に示したように、『個人的な体験』でも多く採用され、特に第4章では「名詞+みたいに」の形で12例出ている。

4-み-1 すぐさま雌鶏みたいにきわめてあわただしく半開きのドアのかげに後退した。(火見子)

4-み-2 火見子を滑稽な熊の漫画みたいに見せ、(ワンピース)

4-み-3 そして彼女は味をみているオランウータンみたいに下唇をとがらせてウイスキーをごくわずかの量だけすすった。(火見子の下唇)

4-み-4 広場には腹をあけられた魚みたいに横たわっている若い死者と、(死者)

4-み-5 脳が風船みたいにふくれあがり充血する。(脳)

4-み-6 「鳥、あなたはいつもそんな風に素早く大量にウイスキーを飲むの？紅茶みたいに。」(ウイスキー)

4-み-7 「～疲労困憊した遠泳選手みたいに心臓をおかしくするのがおちよ、～」(鳥)

4-み-8 「欲求不満のヒヨコみたいにクチバシで探りあうのはよして、これから一緒に寝よう！」(火見子と鳥)

4-み-9 「～それともたとえば盲腸みたいに信じられないほどおかしい器官で？」(おかしい器官)

4-み-10 「眠らない子供を探して駆けまわる砂男みたいに！」(火見子)

4-み-11 太陽みたいに熱く赤い頭のなかを滑稽な小人がディズニーの映画で見たピーター・パンの妖精のように、光の粉をまきちらして輝きながら跳梁した。(頭のなか)

4-み-12 一応きちんとした麻のタキシードを着こんだ小柄な紳士が卵みたいに丸い頭をあおむけて、(丸い頭)

第4章では、鳥と火見子のやり取りが続く中、「ようだ」同様、比況(比喩・例示)を表わし、「ようだ」より会話で多く使われる「みたい」がここでも会話の中で用いられている。しかし、「ようだ」に比べれば全体的に使用されている数は少ない。

### 5.3 「らしい」の用例

「らしい」に関しても『日本国語大辞典』には以下のように定義されている。

らしい：動詞・形容詞・ある種の助動詞の終止形に付く。また、体言・形容動詞語幹などに付く。文語形は「らし」。

①根拠や理由のある推定を表す。

「父親らしい男と歩いていました。顔や体つきがよく似ていましたし」。

「この雲行きではどうやら明日は雨らしい」

②不確かな伝聞などに基づく推定を表す。

「噂では母親が反対しているらしい」

「判決が下ったらしい。町は大変な騒ぎだ」

それぞれの語について辞書の定義を参考に、初・中級の日本語学習者に説明することを念頭におき、比較、考察してみる。なお、辞書にある「状態」は「様態」、「推定」は「推量」の語を用い、又、意思を表す「よ・ようだ」はここでは取り扱わないこととする。

このように「らしい」は話す人が見たり聞いたりしたこと、現時点で判断したことを言いたいときに使うが、直感でそう思ったのではなく、そのように推測した客観的な根拠が何かある場合に使うことが多い。自分の主観だけで言うときに使うと不自然である。「らしい」はほかに、「そのものの典型的な性質をもっている」ということを表す表現である。『個人的な体験』の中で、根拠に基づく「推量」を表す「らしい」はわずかに以下の6例あるのみである。

4-ら-1 「ぼくの息子の場合は単なるアクシデントらしいよ」と鳥はいった。

7-ら-1 「もういちど今度は正常にしようか？ぼくは恐怖感を追いはらえたららしいよ」と鳥はいった。

9-ら-2 授業のあいだに、鳥は確かにあれについて知っているらしい数人の学生たちを見つけたしたが、かれらは都内の高校からきた都会的で軽薄な連中で、鳥の失敗をヒロイックなところもある滑稽としてうけているのだった。

10-ら-3 「フルシチョフが核実験を再開したわ、それも今までの水爆にくらべて比較を絶して大きい爆弾を実験したらしいのよ」

11-ら-4 「夜遅くまでいろいろあってからのことらしいんだよ」と鳥は新しい怯えにとらえられていった。

12-ら-5 「だめらしいわ、早すぎるのね」と暫く試みたあと、火見子はすっかり落胆し再び自信をうしなっていた。

### 5.4 副詞とのつながり

一般に、「ようだ」「みたいだ」「らしい」(または「そう」)が比況の意味で使われる場合、「今にも、いかにも、さも、まるで」などの副詞と呼応される場合が多いが、『個人的な体験』では、殆ど使われず、それぞれの助動詞が単独に出てくるのも大きな特徴である。「さも～ように」「まるで～ように」に関しては用例がなかった。

例1：鳥は自己防衛の熱情にかられ、あたかも保育器のなかの赤んぼうの怪物から、ガラス仕切りごしに狙われているとでもいうように身がまえた。

例2：鳥は入ってすぐの柱にかけられた楕円の鏡のなかに、額から鼻へ汗を浮かせ、唇は吐息になかばひらき、そしていかにも自己閉鎖的な暗い眼をしている、痴漢みたいな顔を見た。

例3：いかにも怠けものみたいにおたがいにもっとも負担のすくない姿勢をとって、

例 4: いまにも眠りこもうとしているかのようにおぼつかない声で認めた。

例 5: 看護婦は鳥と並んで立つと、いわばこの病院でもっとも健全で美しい赤んぼうの父親にたいして話しかけるとでもいうようにそういった。

例 6: 「赤んぼうは、ちょうどアポリネールみたいに頭に繃帯をまいていました」

例 7: ひとりの人間をめぐって、ちょうど樹木の幹から枝や葉が分れるようにさまざまな宇宙がとびだしてゆくことになるわ。

## 6. まとめ

『個人的な体験』は昭和 39 (1964) 年 8 月に新潮社より刊行され、刊行当時著者は 29 歳であった。著者は、『新しい人よ眼ざめよ』他で、この作品は、「私自身に障害を持つ子供が生まれたという個人的な出来事に根ざしている」と語っている。著者の長男は、昭和 38 年 6 月に、脳に障害をもって誕生した。その後、『空の怪物アグイー』他、知恵遅れの子供と父親の関係を題材に多くの作品が書かれてきた。執筆後 16 年経って、著者自身が当時を振り返り、『個人的な体験』の後書きに次のように書いている。

この小説を書いていた際、小説の書き手（大江健三郎）と主人公（鳥、通称バード）とを同一視することはなかった。両者の共通点は、頭部に異常をそなえて生れた新生児を持つことのみである。

また、このようにも書かれている。

…現実生活での経験にぴったりかさなっているというのではなく、しかしやはりその自分としての経験に、深いところで根を達しているものであった。それらの作品のいちいちについて、表現されている知恵遅れの子供と父親の関係の差異を見れば、ひとつの作品ごとの、小説の方法についての僕の戦略があきらかである。それは文体の選び方ということへも、直接力を及ぼしたのであった。

さらに、大江健三郎自身が、読書講義 (2006 年 8 月 13 日—執筆から 42 年後、ジュンク堂書店池袋本店にて) の中で以下のように述べている。

読書によって自分の主題も文体も変えてゆく・変

ってゆく、という文学的な人生を生きているうち、私の実人生に思ってもみなかった事態が生じたのです。(中略) それは長男の光が頭に畸型を持って生まれたことによる変化です。(中略) 最初に私がやったことは、その息子の誕生について書くことでした。いまいったとおり畸型を持った子供が生まれた、若い父親がいろいろと苦しむ、ということを書いた。それも、その苦境を乗り越えて、当の子供を引き受けて、共生していこうと決心する過程を描いた小説が、『個人的な体験』です。

『個人的な体験』における助動詞「ようだ」の使用頻度に関して調査を行った結果、「推量」「様態」「比況」等全てを合わせると、580 もの用例が見つかった。310 ページほどの単行本であるので、1 ページ平均 2 回の頻度で「ようだ」が使用されていることになる。読み手として多いという感覚は間違っていないようである。

「ようだ」よりも客観的である、推量の助動詞「らしい」がほとんど使われず、主観的な「ようだ」特に比況 (比喩・例示) の用法が多用されることで、本タイトルである鳥の「個人的な体験」に対し、読者の共感と理解を得られるか格闘しているという印象を受ける。あくまでも具体的に出来事を表現しようとする著者の姿勢が、「ようだ」を多用することにより、主観的な文体になったように思える。あるいは、著者が意図して操作した文体であるかもしれない。

今回は、『個人的な体験』のみの分析となったが、前後に書かれた作品の中では、助動詞「ようだ」がこれほど使用されているのか、また、筆者が前出の読書講義で触れていたように「三年ごと」に文体を変えている流れの中の一つであるのか今後解明していきたい。

### 参考文献:

- 大江健三郎 (1983) 『新しい人よ眼ざめよ』講談社
- 大江健三郎 (1998) 『私という小説家の作り方』新潮社
- 小川芳男・林大編集 (1998) 『日本語教育事典』大修館書店
- 饗庭孝男・朝比奈誼・加藤民男編 (1993) 『新版 フランス文学史』白水社
- 窪田般彌訳 (1992) 『アポリネール詩集』ほるぷ出版
- 松村明編 (1996) 『日本文法大辞典 13 版』明治書院
- 安岡章太郎他 (1997) 『群像日本の作家 28 安岡章太郎』小学館
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 松村明編 (1996) 『日本文法大辞典』13 版 明治書院
- 『新潮』第 110 巻 12 号 (2014 年 12 月) 新潮社
- 『すばる』(2006 年 11 月号) 集英社